

12. わが国の自然災害と暮らし

自然災害は人の暮らしがなければ存在しないわけで、暮らし方に相当支配されています。したがって、そこには時間や土地の利用の仕方などの要素が含まれていて、単純に素因と誘因を区分できるものではありません。そして、突発的に発生するように見えて、災害発生には理由があります。また、これまでの経験や災害の遺跡である地形の成り立ちなどから、どのようなところでどのような災害がおきやすいかは、概ねわかってはいますが、常に盲点を突かれてしまいます。

自然災害はどのような変化をもたらしてきたか、恵み、共生のあり方についての知恵を示唆しているようで、賢く学ぶことが大切です。

自然災害の規模が大きくなると、これまでの生活環境を変えるだけでなく、地形をも変えてしまい、その影響は気象やこれまでの暮らしの環境を否定することになり、新たな構想をしないと生存することが出来ないというところにまで至ります。その復旧や復興には、莫大なコストがかかるだけでなく、被害者は精神的なダメージも受けることになります。

インフラなどの災害対象物のあり方、保有形態、利便性、必要でないものや代替できるものを蓄積し過ぎていないかどうか考える時期に来ていると感じます。災害は身軽で物が少ないほうが被害は少ないのは当然で、ハード的対策は完全でなく、維持するにもコストがかかります。万一、破壊や機能の損失が発生した場合、周りの広い環境を悪化させることもありえます。

そこで、“欲しいものなのか、必要なものなのか”という基本に戻って、これまでの社会資本を見直し、可能な限り軽量で管理しやすく災害のリスクが少ない方向に再編していく必要があると思います。少子高齢化によって社会構成が変化していく中で、さまざまに整理されるべきことがあると思います。

例えば、最も大切である社会福祉施設が、最も災害リスクの高いところに立地しているなどは異常なことです。施設だけではありませんが、自然災害の視点での国土利用、ゾーニングが必要です。まずは住居環境の安全、そしてそれを支援する環境の維持が必要になります。まず、水田や遊休地の活用、里山の新たな活用、遊水地の確保、避難箇所の確保と拡充、防災にかかわる人材の養成、早期からの防災教育、学校防災の必要性を指摘しておきたいと思います。これまでの災害は、私たちの暮らし方にさまざまなことを対応コストの最小化、命の安全確保の面で教えてくれているような気がします。